

岡夫詩における叙事性（下）¹

内 藤 忠 和

「岡夫詩における叙事性」(上) の概略

本研究は、70年に及ぶ創作歴を誇る中国の現代詩人岡夫（1907-1998）の生涯と詩作を年代順に概観・分析し、その詩風の変遷の迹を辿ることを主たる目的としている。前稿「岡夫詩における叙事性」(上)²では、岡夫の前半生と1920年代から40年代までの初期作品を対象として概観・考察し、以下のような結論を得た；山西の地で西欧の人文諸学の洗礼を受けた少年期の岡夫は、“愛”・“生命”・“創作”といったテーマを叙情的かつロマンティックに詠いはじめるが、次第に社会的なテーマに眼を向け始め、革命運動に身を投じた1930年代初めには、彼自身の経験を叙事的かつリアリスティックに語るようになる。数年間にわたる投獄生活を経た後、共産党員として抗日戦争・国共内戦に参加した岡夫は、自身が見聞した群衆の戦いや生まれ変わりを物語性豊かに詠うようになり、詠われる物語からは、この当時山西の解放区で発表された作品に多く見いだされる【問題⇒解決】構造が存在する。

そしてこうした叙情から叙事、ロマンティックからリアリスティックといった変化の軌跡は、彼が所属する文学流派である“山葉蛋派”の作家たちが同時期に辿ってきたそれと相似形を描いている。

本稿では、引き続き中華人民共和国建国後の岡夫の詩作と後半生に焦点を当て、その詩風の変化の軌跡を素描していきたい。

4. 建国後17年間の岡夫（1949-1966）

4.1 中華人民共和国成立後の岡夫

1949年10月、中華人民共和国が成立すると、岡夫は山西省文学家协会（後の作家協会）主任として省の文芸組織建設の任務を担うことになる。まず鄭篤らと共に文芸雑誌『山西文芸』（後の『火花』）を創刊し、さらに『山西日報』に文芸副刊『文芸』を成立させるなど、次々と作家たちに作品発表の場を用意した。1951年1月に開催された文芸・新聞頒獎大会の席上で彼は1年あまりにわたる省の文芸活動について報告し³、質量ともに一定の成果が上がったことを踏まえて省の文学事業が軌道に乗ったと総括している。この功績が評価さ

れ、岡夫は北京に異動となり、上位組織である華北文聯の準備に従事し、成立後は指導業務を担当した。

多忙な組織工作に追われつつ創作したこの時期の作品は共和国の誕生を喜び、新しい社会を賛美する喜びに満ちている；

まずは「歌唱我们的共和国」(1950年)を見てみよう；

「歌唱我们的共和国」

歌唱我们的共和国—

它给了我们自由和土地，
让我们在自由的土地上耕作，
再不受侵略者和地主老爷的压榨。

歌唱我们的共和国—

让我们的锅炉升火，烟囱冒烟，
让我们的机器车轮日夜地飞转，
创造着城市和乡村的繁荣。

歌唱我们的共和国—

它抬高了我们的身价并给了我们力量，
使我们在人类争取和平进步的伟业中，
成为一支最光荣的先锋队。

歌唱我们的共和国—

它给我们的歌唱开拓了广阔的天空，
让我们的歌声长出强壮的翅膀，
向着无限的光明飞去。

「我らの共和国を歌い讃えよう」

我らの共和国を歌い讃えよう—
共和国は我らに自由と土地を与え、
我らに自由の大地を耕させ、
二度と侵略者と地主の搾取を受けないようにしてくれた。

我らの共和国を歌い讃えよう—

共和国は我らのボイラーに火を入れ、
煙突から煙をもうもうと出し、
我らの機械と車輪を昼となく夜となく回して、
都市と農村の繁栄を創造してくれた。

我らの共和国を歌い讃えよう—

共和国は我らの地位を引き上げ、力もくれた、
人類が平和と進歩を獲得する偉業の中で、
我らを最も栄えある先鋒に仕立ててくれた。

我らの共和国を歌い讃えよう—

共和国は我らの歌に広々とした天空を開拓してくれた、
我らの歌声に強くたくましい翼を生やし、

無限の光に向かって飛び立たせてくれた。(1950年9月21日)⁴

“我らの共和国を歌い讃えよう”というフレーズが各連の冒頭で繰り返される本作は、共和国が人々に自由と土地と繁栄をもたらし、無限の希望を開拓したことへの喜びと感謝の念を詠っている。また、同年12月に発表された「紅花緑葉詞」(1950年)は、山西省で開催された第一回労働模範大会の様子を描いた三章三十連23ページにも及ぶ大作であり、共和国が成立して新しい社会になってから、労働者や農民が主人公として社会を支え、その功績が正当に讃えられるようになった喜びが随所に表れている。

まず第一章では全国の労働模範が皆の代表として道中歓迎を受けつつ会場に集結するまでを描いている；

第一章(三)

音乐队的喇叭，
闪着金光，
吹奏着雄壮的歌曲，
走在最前头；
迎上去，迎上去，
朝着专车，
朝着专车载来的劳模。
人民的专列火车，
送来人民的劳模。

首长们迎上去，
和劳模握手；
代表们迎上去，
和劳模握手。

一阵一阵的彩纸，
飞飞扬扬，
扑在劳模的头上脸上，
身上脚上，
满像三月天，
落下一阵一阵桃花雨。

第一章(三)

音楽隊のラッパが、
金色にきらめきながら
勇壮な楽曲を演奏して
最前列を行く；
迎えにいく、迎えにいく、
専用車に向かって、
専用車に乗る労働模範に向かって。
人民の専用列車は、
人民の労働模範を乗せてきた。

首長たちは迎えに行き、
労働模範と握手する；
代表たちも迎えに行き、
労働模範たちと握手する。

紙吹雪が
辺りを舞い、
労働模範たちの頭に顔に、
軀に足に当たる、
3月に降る
桃の花吹雪のように。⁵

続く第二章では、労働模範たちの経験報告から党書記の総括に至るまでの大会の様相が、筆者の労働模範に対する賛辞を交えつつ描かれる；

第二章(十一)

所以你们，

李顺达、郭玉恩，

你们组织起群众，

创造了新农村。

农民分到了土地，

土地还将会使用。

组织互助多亏你们有经验，

研究技术你们不怕费脑筋：

冷热地，

阴阳粪，

积肥上追肥，

选种又浸种，

又要改造地，

又要改造人。

你们使得农民，

大囤圪堆小囤满；

还给大家活生生看，

组织起来赛过单干。

第二章（十一）

だからあなたたち

李順達、郭玉恩よ、

あなたたちは群衆を組織し、

新たな農村を創造した。

農民は土地を分配されたが、

さらに土地が使用できるようにしなければならぬ。

互助組を組織できたのもあなたたちの経験のおかげ、

技術研究にも知恵を振り絞ってくれた：

土地の寒暖に、

糞の乾燥度、

堆肥に追肥、

選種に浸種、

土地を改良し、

人も生まれ変わらせた。

あなたたちは農民の

困いを食料でいっぱいにし；

さらにみんなに示してくれた、

組織化が一人でやるより優れていると。⁶

そして第三章では、大会後の労働模範への賞品授与の様子が描かれ、最後に毛沢東への感謝の言葉が詠われて作品は締めくくられている；

第三章(六)

还有一项普遍奖，

每人领袖像一张，

所有喜事都忘记，

这件喜事不能忘。

第三章（六）

さらに全員に賞品として、

指導者の画像が、

あらゆる喜びを忘れても、

この喜びだけは忘れられない。

他是我們帶路人，
領導我們大翻身，
領導生產向前進。

時時向他虛心學，
更要學他最虛心，
誰也比不上他偉大，
他當群眾小學生。

時時向他學，
年年來開會，
永遠作模範，
永遠不掉隊。

いつも毛主席に学んできた、
彼は我らの先導者、
我らの生まれ変わりを指導し、
生産の進歩を指導した。

いつも毛主席に虚心に学んできた、
もっと主席に謙虚に学ぼう、
誰も彼の偉大さには及ばない、
彼は群衆の学生となった。

いつも毛主席に学ぼう、
毎年大会に参加しよう、
永遠に模範になり続け、
永遠に落伍すまい。(1950年12月)⁷

この時期の作品は、叙事的なタッチは引き続き用いられているものの、40年代に主流となっていた物語的な作風はやや弱まり、その代わりに詩人自身の共和国誕生を祝う思いと、未来への希望に満ちた心情が前面に出てきている。

先にも触れたように、1951年1月に山西省での文芸活動を概観し、自身が進めてきた省文芸界の基盤作りが軌道に乗ったことを確認した岡夫は北京に移り、以後1953年末まで華北文聯において指導業務を担当するようになる。この3年間、岡夫は全く詩を発表していない。この時期の彼の状況を知り得る資料および回想が存在しないため推測するしかないが、組織業務の傍ら王応慈・任桂林らと共同で映画『虎穴追踪』の脚本執筆に従事していたと考えられる。

中国文学芸術界聯合会（中国文聯）へ

1953年9月から10月にかけて、北京で全国第二回文芸工作者代表大会が開催された。この大会の前後、全国各地での文芸組織の成立という目標を達成した以上、文聯はその任務を終えた、という理由で文聯組織の解散・再編が進み、岡夫が所属していた華北文聯も解散となった。全国組織である中国文聯も解散が予定されていたが、上層部の同意が得られず、一転、存続が決定し、解散を待たばかりであった組織は人手不足に陥ってしまう。そこへ華北文聯から岡夫を含む数名が加わり、舞踏、戯曲、民間芸術といった各部門の指導者を吸収し

た形で中国文聯は再スタートを切ることとなった。以後岡夫は1966年に山西省に戻るまで、この組織で創作活動の傍ら組織業務に従事しつづける。

中国文聯在籍中は学習部の部長を担当し、「中国革命史講座」,「歴史唯物主義と弁証唯物主義講座」といった大型講座の他、毎年毛沢東著作学習班を開催するなど、文芸界の政治学習活動を組織・推進した⁸。

多忙な組織業務をこなす一方、1954年から岡夫は詩作を再開する。この時期の創作の主要な源泉は、時折訪問する故郷で見聞した事物や、詩人の耳目に入ってくるニュースであった。まずは「英雄的土地（三首）」(1954年)に注目してみよう。本作は岡夫が久しぶりに故郷に戻った時の経験を基にしており、「路上」,「英雄的土地」,「新的伝説」の三首から構成されている；

「英雄的の土地」

「路上」

沿着一溜河滩,
马车忽紧忽慢,
道路不算平坦,
但是加宽了一半。

路上走着骆驼,
胶皮轮也来往不断,
城市给乡村送盐,
乡村给城市驮炭。

四月的春风浩荡,
杨柳条插满河岸,
摇晃着稚嫩的头儿说道:
看看我们呀,你看,你看!

远处碎石滩里,
嗨,一辆吉普车出现,
通车的人告诉我,
那是开往钻探站。

「英雄の土地」(三首)

「路上」

河原に沿って、
馬車が時に早く時に遅く、
道は平坦とは言い難く、
だが広さは増した。

路を駱駝が行く、
タイヤも絶えず行きかう、
街から農村へ塩を送り、
農村は街へ石炭を運ぶ。

四月の風は果てしなく、
河原には柳の枝がいっばいに、
柔らかな芽を揺らして言う：
私たちを見て、見て、見て！

遠くの碎石場から、
ジープが一台現れた、
同乗者が私に教えてくれた、
あれは試掘場に向かうのだと。

走过几处石灰窑，
热气和灰粉弥漫，
筑堤人戴着口罩、风镜，
正把灰泥搅拌。

田埂上面一群人，
熙熙攘攘叫唤，
十行播种机刚来到，
谁不想看看实验！

顺手摘一朵花，
我心里暗暗赞叹，
走过这条路有千回，
这回倒像初次会面。

地上面搞增产，
地下面搞钻探，
几个年头不见，
时代就这样转换。

何か所もの石灰窯を通り過ぎ、
熱気と粉塵がもうもうと
堤の上では人がマスクとゴーグルをつけ、
石灰をかき混ぜている。

あぜ道の上には人ばかり、
にぎやかに騒いでいる、
十条種まき機が届いたばかり、
誰もが実験の様子を見たいと言うもの！

無造作に野の花を摘み、
心中秘かに讃嘆する、
この道を通ったのは千回にもなるが、
今回はまるで初めてのようだ。

地面の上では増産を進め、
地面の下ではボーリング調査、
ほんの数年見なかっただけで、
時代はこうも変わるものか。⁹

このように、まず「路上」では新技術が導入された農地や石灰窯など、帰郷の道すがら目にした故郷の変化がリアリティに描かれている。続く「英雄的土壌」において、詩人はこの土地が嘗て祖国を守った戦場であり、自身も激戦の中に身を置いていたことを回想する；

「英雄的土壌」（節録）
望着熟悉的山冈，
涌起云一般的回想，
粉碎有名的九路围攻，
这里正是战场。

骄横的敌人骑着战马，

「英雄的土壌」
良く見知った丘を眺めながら、
雲のように思い出が湧き出てくる、
かの有名な九方面からの包囲を粉碎した戦い、
ここがその戦場だ。

傲慢な敵は戦馬に跨り、

闯入这个袋形的火网；
战马嘶溜溜惊叫了一声，
山网上漫天飞起来火光。

我们的部队风暴似的压下，
把敌人压在河水中央，
河水连人带马把他们吞去，
只留下一些盔盖在河面漂荡。

敌人来不及驮运尸首，
草草地举行了个火葬，
三千具侵略者的骸骨，
肥沃了这块红色的土壤。

还记得打落一架敌机，
也在这一段漳河滩上，
毁掉机身，拆卸了零件，
我们建成个小小铁工厂。

从此我们巩固了这块根据地，
战斗在敌人的后方，
用鲜血和铁的意志，
保卫了可爱的祖国和家乡。

この袋のような砲火の網に飛び込んできた；
戦馬は驚き嘶き、
丘の上の空は火線が飛び交う。

我らの部隊は嵐のように圧倒し、
敵を河の中央に釘付けにした、
河の流れは人馬ともども敵を飲み込み、
ヘルメットが川面に漂うばかり。

敵は遺体を運ぶこともできず、
慌ただしく火葬を行った、
三千もの侵略者の遺骨は、
この紅い土壤を豊かにした。

敵の飛行機を撃ち落とすのも、
この漳河の河原であった、
機体を打ちこわし、部品を取り外して、
我らは小さな鉄工所を作った。

これ以後我らは根拠地を強固なものとした、
敵の背後で戦い、
鮮血と鉄の意志を以て
愛すべき祖国と故郷を守った。¹⁰

このように祖国を守った英雄たちの物語を回想した後、続く「新的伝説」では、この土地に新たに広まった伝説を耳にする；

「新的伝説」

在我生长和战斗过的这块土地上，
我几乎认识这里所有的人，
我们共同用鲜血保卫过这块土地，
艰苦的岁月里一同嚼过树皮草根。

「新たなる伝説」

私生まれ育ち戦ったこの土地で、
私はここのほぼ全ての人を見知っている、
我らは共に鮮血でこの土地を守り、
困難な日々にはともに樹木の皮、草の根を齧った。

戦争中の英雄故事我都知道，
古代的神话我也记得烂熟，
但这回在一个山窝的茅屋里，
我却听到一个崭新的传说。

“几年前有人背着帆布挎包，
用小镢头在东山岩石下乱敲，
敲下一些岩石用鼻子嗅嗅，
就打成包裹给北京寄回去了。

“以后来了大批人起房盖屋，
玉带似的电灯缠满了山腰，
只听得山上和河里机器轰隆隆响，
可是谁也不能去参观一遭。

“不用说，这都是给咱国家建设，
可是首长为什么不给咱作个报告？
迷信话咱们不讲，可是你说，
这不像古话里说的，南蛮子取宝？”
(以下略)

戦争中の英雄物語を私は皆知っている、
古代の神話も私は熟知している、
だが今回山奥のあばら家で、
私は新たな伝説を耳にした。

“数年前、ズックの鞆を背負った男が、
東山の岩を金槌で叩きまくり、
叩き割った岩石のかけらの匂いを嗅ぎ、
包んで北京に送りつけていた。

その後多くの人が家を建て、
珠の帯のように電燈が山腹に広がった、
山上と河では機器がゴウゴウ響くのが
聞こえたが、
誰も様子を見に行くことはできなかった。

言うまでもなく、これは我らが国家の
建設のためである、
だがなぜ指導部は我らに報告がないの
だろう？
迷信などは信じないが、だが
これは昔よく言っていた、よそ者に宝
を横取りされる、という類の話ではないか？”¹¹

噂の真偽を確かめに現地に向いた詩人は、そこが上質の粘結炭の産地であり、近い将来大工業地帯が出現するだろうと責任者から告げられる。嘗て自身も戦ったこの土地に新たな伝説が生まれようとしていることを知った詩人は“我らが血と汗を以て守った光栄なる土地よ/我らは多く見積もっても半分程度しか理解していない/未来の光景は、信じてくれ/あらゆる神話よりも燦然と輝いているだろう。”と新たな物語への期待を詠ってこの作品を締めくくっている。

以後、50年代中葉においては、国家建設を支える公債を買う人々の忠誠心

を讃えた「買無価之宝」(1955年1月)、炊事員として長年党を支えてきた老人を描いた「老曹小伝」(1956年夏)、姑や隣人の無理難題を見事に切り抜ける女性の姿をユーモラスに歌う「巧媳婦—民間故事—則」(1956年7月)、久々に訪れた故郷の変貌を描き、未来への希望を詠った「故郷(二首)」(1957年)など、作中に詩人自身が登場してルポルタージュのように新社会やそこに生活する人々を描く叙事性の強い作品が多く発表される。

4.2 反右派闘争を経て

1950年代後半、中国共産党の方針は、知識人層に自由な発言を求めた“百家争鳴・百花斉放”(1956年)から批判勢力を徹底的に粛清する反右派闘争(1957年)へと急転換し、1958年には数多くの知識人・文化人が“右派分子”として職を失ったり農村での労働改造を強いられたりもした。

中国文聯の幹部であった岡夫は、数多くの同僚が“右派”のレッテルを貼られて批判にさらされ、農村に下放する姿を見て承服しがたいものを感じるが、彼らを慰め励ますことしかできずに苦悩する。そこで彼は長年の宿願を果たすために創作休暇を取り、北京市郊外の頤和園近くにある西山碧雲寺に滞在して草嵐子監獄時代の経験を小説の形で表現しようとした。数年の苦闘の後、原稿は完成するが公表されることはなく、後の文化大革命期間中には彼が“叛徒”である証拠として注目され、彼に災厄をもたらすこととなる。¹²

岡夫をめぐる環境の変化は彼の詩作にも大きな影響を及ぼし、1958年以降、旧体詩が増加し、自由体詩の数を上回るようになる。

年代	50	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66
自由体	4	2	1	4	3	3	0	3	1	1	0	0	0	0
旧体	0	0	0	1	1	3	1	7	11	2	5	0	3	1

この時期突然増加した旧体詩のテーマは概ね以下の5種に分類できる；

- ① 友人との交友・別離を詠ったもの
- ② 草嵐子監獄時代を初めとする過去の回想を主題としたもの
- ③ 国外のニュースをテーマとしたもの
- ④ 中央幹部としての地方視察を題材としたもの
- ⑤ 新年や大会開催の記念に詠んだもの

まずは①に分類できる作品から注目してみよう、「下放贈別」(1958年1月)は、詩人自身が下放に赴く際に友人に送ったものである；

「下放贈別」

君行塞北花果山，
我入三晋米粮川。
自来都说江南好，
谁知江北有江南！

共产党章九千字，
农业纲要四十条。
领此真谛下乡去，
如鱼投水漆投胶。

生根扎实喻性灵，
也学杨柳也学松。
杨柳插枝到处活，
松柏四季长青青。

「下放への餞別」

君は塞北の花果山に行き、
私は三晋の米どころに入る。
従来皆江南が良いと言うが、
江北にも江南があると誰が知っていたら
う！

共産党章9千字、
農業綱要は四十条。
この要諦をもって農村に入る、
魚が水に飛び込み漆が膠に溶け込むように。

しっかりと根を張り魂に教え諭す、
柳に学びまた松にも学ぶ。
柳は枝を挿せばどこでも生きる、
松柏は四季を通じてどこまでも青い¹³。

このように党の方針を胸に下放して農民に学び農村に根を張り巡らそうという意気込みが詠われている。他に「聯歡与贈別」(1957年12月)、「呈郭老」(1960年)、「送同志下放」(1960)、「戲答友人尋訪」(1961年)、「西北行—送同志」(1962年)、「重聚」(1963年)、「唱答贈老友任行健同志」(1965年)、「贈天津友人」(1965年)など、友人との別離や交友を題材として作られたものがこの時期における旧体詩の主たるテーマとなっている。

続いて③に属するソ連の月探査機ルナー一号打ち上げのニュースを祝福した「春光銀燕」(1959年)を取り上げてみよう；

「春光銀燕」(節録)

其一
一支火箭横凌空，
月里嫦娥醉东风，
人间有了通天术，
再不寂寞广寒宫。

「春の銀の翼」

其の一
一機のロケットが上空を横切り、
月の嫦娥は春風に酔う、
人の世には天に昇る術があり、
二度と広寒宮も寂しくない。

其六

春光銀燕第一只，
 举世和平人共依，
 新岁白宫未阖眼，
 惶惶亦来望天地。

其十

高歌猛进溯激流，
 几时不在心头？
 豪情欲乘火箭去，
 且为东风放一讴。

其の六

最初の春の銀の翼、
 世を挙げて平和を望む人たちが頼りにし、
 新年のホワイトハウスは未だ眠れず、
 びくびくとしてまた天池を望む。

其の十

高らかに歌いながら猛進し、急流さえ遡る、
 いつ気にかけていないことがあろうか？
 豪壮な志はロケットに乗ろうとし、
 かつ東風（革命の力）のため歌を詠う。¹⁴

「嫦娥」，「広寒宮（月の世界の宮殿）」といった月に関わる古典的キーワードを交えつつ友邦であるソ連の月探査機打ち上げ成功を祝福し、社会主義革命の未来に期待する心情が歌われている。一方敵陣営であるアメリカを手厳しく批判する「最後警告你」(1958年)，「美挨打」(1961年)といった作品も数多く見られる。

このように1958年から66年までに急増した岡夫の旧体詩に注目してきたが、ここで一度何故岡夫が長年親んできた自由体を離れ、制約の多い旧体を採用し始めたのか、考察してみたい。

当時、文芸界を取り巻く状況は厳しさを増し、社会は大躍進政策の失敗と自然災害などによる飢饉に苦しんでいた。しかしこの時期に発表された旧体詩からはそうした悲壮な影を見出すことは難しく、友人たちとの交流や国外のニュース、過去の回想といった題材が比較的明るいタッチで描かれており、現実の社会状況と作品のトーンの間ズレが感じられる。これは50年代前半まで中心となっていた中国の農村の生まれ変わりや社会主義建設の進展を一節の物語のようにリアリスティックなタッチで語ってきた詩風とは題材的にも手法的にも明らかに異質であり、こうした当時の社会状況と作品のトーンのズレ、そして作風の大きな転換の背景には、岡夫の共産党員としての忠誠心と文学者としての良心の間に葛藤があったのではないかと推測される。

本稿の（上）でも概観してきたが、岡夫は1930年代に革命運動に身を投じ

て以来、詩歌を革命推進の武器と見做し、農村や労働者の読者を獲得するため、解放区や建国後の農村の現実を首尾一貫した物語のようにリアリスティックに詠うスタイルを確立し¹⁵、それは50年代半ばまで一定の成果を上げ、支持を受けていた。この段階までは「農村の現実をリアリスティックに詠う」という詩人としての方向性と「読者を獲得して革命を推進する」という党への忠誠心とが矛盾なく融合していたように思われる。しかし反右派闘争によって周囲の同僚が右派のレッテルを貼られて農村に下放され、大躍進の失敗から人々が飢饉にあえぐ現実を前にした時、詩人の良心に忠実に「農村の惨状をリアリスティックに詠う」ことと党への忠誠心に従って「文学作品を用いて革命を推進する」こととの間に齟齬が生じるようになった。その結果、岡夫はどちらも裏切らない方法として、従来のテーマを避けて外国のニュースや近い人間関係、過去の回想を題材とし、より制約の多い旧詩体という形式で抑制を利かせながら自身の感興を表現することを選んだのではなかろうか。

そしてこうした岡夫の葛藤は数少ない自由体詩にも反映されており、従来と趣の異なる作品がこの時期に登場している、まず草嵐子監獄時代を回想した「神奇的弁証」(1960年)を取り上げてみたい；

「神奇的辩证」

我们都在寻求真理，
而又互不相知，
敌人硬把我们捕来，
给我们作了联系。

同住潮湿的牢房，
同吃着霉烂的糙米，
同戴着沉重的脚镣，
同呼吸污秽的空气。

同受过残酷的刑罚，
同长了斗争的智慧，
相同的遭遇和命运，
把我们变成了同志。

「不思議な弁証法」

我らは皆真理を追求している、
しかし互いにそれを知らない、
敵は我らを捕まえて
無理やり我らに關係を作らせた。

共に湿った牢獄に住み、
共に黴が生え腐った玄米を食い、
共にずしりと重い足かせを付け、
共に汚れた空気を吸う。

共に残酷な刑罰を受け、
共に闘争の智慧を蓄えた、
同じ境遇と運命が
我らを同志に変えた。

敌人没有想到，
我们也没有想到—
神奇的辩证法，
创造了这个奇迹。

敵は思いもよらなかったろう、
我らも思いもよらなかった—
不思議な弁証法が、
この奇跡を生み出したのだ¹⁶。

このようにばらばらだった知識青年が草嵐子監獄に収監されることによって却って成長を遂げ、同志として結束したと往時を回想している。岡夫がこうした草嵐子監獄の日々を詩の題材としたのは、上述のように長編小説『草嵐風雨』を執筆していたからであろうが、葛藤を抱えていた当時の岡夫にとっては自身の革命家としての出発点を振り返る意味合いもあったと考えられる。

こうした過去に目を向ける傾向は、先行する「老戦友的幽默」(1958年)、「解嘲篇」(1958年)にも見出せるが、「解嘲篇」にはもうひとつ注目すべき点が存在する；

「解嘲篇」(節録)
据说诗人都会弹竖琴，
诗人们供奉着缪斯。
无才华的人呀，你的竖琴呢？
你的缪斯又在哪里？
诗歌也要写出英雄人物，
要有个有头有尾的故事：
要有那雄伟高尚的情怀，
也要有那缠绵悱恻的词句。
而你的这些篇章，
名副其实的“四不像”。
“新格律”？你弄不来形式的整齐，
自由诗？你不善于自由地奔放；
学民歌？你没有那质朴和自然，
仿“近体”？你不懂平仄和对仗。
更不说那内容空泛，
既无技巧又缺灵感；……

「言い訳の歌」

聞くところによれば詩人はみな竖琴を弾けるという、

詩人たちはミューズを信奉しているのだ。

才無き人よ、あなたの竖琴は？

あなたのミューズはどこにいる？

詩歌は英雄を描かなくてはならない、

また首尾整った物語も必要だ：

雄大で高尚な情感と

連綿と心の乱れを綴る詩句も必要だ。

だがあなたのこの作品たちは、

名実ともに“四不像（鶴のように得体のしれないもの）”だ。

“新しい形式と韻律”？あなたは形式を整えることもできないのに、

自由詩？あなたは自由奔放にふるまうのが苦手なのに；

民謡に学ぶ？あなたにはあの質朴と自然は存

在しない、

“近体詩”の模倣？平仄と対句もわからないのに。

さらに内容に乏しいのは言うまでもなく、

技巧も無ければ靈感にも欠ける；・・・¹⁷

このように本作の冒頭では詩壇の“理想像”と引き比べて自身の作品の未熟さと試行錯誤に苦しむ詩人の姿が描かれるが、進退窮まった彼の前に新たな別世界が拓ける；“進退窮まった深い谷に落ちた時、／一筋の命綱が飛んできて、／吊り上げられて高原によじ登り、／そこで初めて別天地の広さを目にする。”

吹!対面的工地上,
正掀起建设的热潮:
号子声在空中回荡,
板车在尘雾里飞跑,
男男女女乱穿梭,
一路歌声一路笑……
何不去到那里,
至少凑凑热闹,
不比埋头伏案讴字句,
少一点烦闷和牢骚?

好。说走就走,说到就到,
稿件来不及烧毁,
暂且塞进腰包,
倘被熟人发现,
“咱千里来送鹅毛!”
只要情真意诚,
礼物何嫌微小!
人不该一碰就自卑,
更不可一热就自高:
当成诗艺去献宝,
越推敲它越糟;
当写几张墙报,

おお！向こうの現場では、
建設ブームが巻き起こっている；
掛け声が空中にひびき、
手押し車が土埃の中を飛び回る、
男女がひっきりなしに行き来し、
道中歌声と笑いが絶えない……
向こうに行って
仲間に加われば、
机に突っ伏して文字をいじくるよりも、
煩悶や不平は少なからう？

好し、思い立ったが吉日、
原稿を焼くのが間に合わないなら、
しばし鞆に詰め込んでおこう、
もし友人に見られても、
“ちょっとしたものを持ってきたのさ！”
気持ちさえ本物なら、
プレゼントはわずかでも構うまい！
人は初対面だからといって卑下すべきではないし、
親しくなるとすぐ傲慢になるべきでもない：
詩が出来上がって見せびらかそうとすると、
それを推敲すればするほどダメになる；
何枚か壁新聞を書いた時には、

就觉得没有什么大不了的。
 工作间隙搞文娱，
 大伙围来瞧瞧；
 瞧着哪点碍眼，
 哪点涂掉改掉；
 哪点顺眼顺口，
 试试朗诵也妙；
 不用管弦伴奏，
 不须檀板轻敲，
 假如你嗓门够大，
 扩音器也可不要。
 两手交叉胸前？
 还是加点舞蹈？
 依我看，
 随便一点就好；
 重要的还在那内容和内心
 对于时代的脉搏，
 感到没有感到！
 只求在这里把思想觉悟提高，
 老老实实欢乐欢乐搬运一瓦一砖；

何も大したことではないと感じていた。
 仕事の合間に文芸娯楽をやり、
 みんながそれを囲んで見物する；
 目を通してどこか目障りであれば、
 そこを削って改める；
 気に入ったりテンポが良い箇所があれば、
 声に出して朗読してみるのも良い；
 管弦楽の伴奏など用いず、
 拍子木のリズムも必要ない、
 あなたの声の大きさが十分なら、
 拡声器さえ要らない。
 両手を胸元で交差させようか？
 それともダンスを加えようか？
 私からすれば、
 好きにしてもらっていい；
 重要なのはやはり内容と心から
 時代の息吹が
 感じられるかどうかだ！
 ひたすらこの地で思想的自覚を高めること
 を求め、
 誠実に楽しみながら煉瓦や瓦を運べばいい¹⁸；

息苦しく格式ばった詩壇を離れてやってきた新天地において、詩人は労働の傍ら読者と直接接触合う自由な文芸に携わる楽しみを知る。そして、“認めよう：／ここには／ナイチンゲールも、／薔薇も、／葡萄酒も無く、／銃剣も／爆弾も／機関銃も無い；／だがまさかそれゆえに／感動も、／激情と／詩歌も無いとでも言えようか？”と新天地で出会った詩歌を肯定して作品を締めくくっている。

このように岡夫は本作において、1920年代の少年期から40年代の解放区時代に到る自身の詩風の変遷を回顧し、彼にとって詩とは何か、詩人とは何かを自らに問うている。先に触れた「神奇的弁証」が革命家としての自身の出発点を遡るものであるとすれば、「解嘲篇」は詩人としてのルーツを振り返る作品

となっており、この時期の自由体詩において、岡夫の眼差しは従来向けられていた農村やそこに暮らす人々の生活に対してではなく、自身の過去と内面に向けられるようになっていたことが分かる。

こうした変化の背景には、やはり先に述べた岡夫の党への忠誠心と詩歌への良心の間の葛藤が存在していたと考えられる、この葛藤ゆえに彼は従来用いてこなかった制約の多い旧体詩の形式を選択し、自由体詩においても外の現実から自らの過去と内面に目を向けざるを得なかったのではなからうか。

そして非常に興味深いことに、こうした自身の過去や内面に目を向ける傾向は、50年代後半において、他の山葉蛋派の作家の作品にも共通して見出すことができる¹⁹。

山西省へ

1966年2月、岡夫は家族を伴い山西省文聯に異動した。旧友である作家趙樹理は1年早く山西に戻っており、創作の便宜のため文聯から太原市内の住宅を与えられていた。岡夫が戻ってきた当時、文聯の住宅が不足していたため、岡夫は趙樹理に頼んで彼の住宅の一棟を譲り受け、そこから作家と詩人の交流が復活することとなった²⁰。当時岡夫が壁新聞に発表し、趙樹理が好んで読んでいた作品がある；

「墙报忆感」

万丈光芒一盞灯，
千条航路照通明。
文艺行里干革命，
终身深入工农兵。
延安讲话启示早，
觉悟不高人易老。
小车不倒向前推，
总爱江山无限好。

「壁新聞の思い出」

万丈の光芒に灯り一つ、
千もの航路を明るく照らす、
文芸界は革命し、
終生工农兵の中へ。
延安の講話の啓示は早くから、
自覚が低ければ人は老いやすい、
一輪車を倒さず前に押す、
国土の無限の素晴らしさを愛しながら²¹。

作中では、「文芸講話」への信頼や生涯労働者、農民、兵士に奉仕する覚悟が詠われているが、程なく文化大革命が発動し、岡夫は趙樹理ともども批判の嵐にさらされることとなる。

4.3 まとめ

ここで改めて1950年代から60年代の作品についてまとめておきたい。建国初期、全国の文芸組織立ち上げの任務を担いつつ創作したこの時期の作品は、40年代に引き続き叙事的なタッチを用いているものの、物語的な作風は影を潜め、詩人自身の共和国誕生を喜び、未来に希望を寄せる心情が詠われている。続く50年代前半の作品は、身のニュースや自身の経験を題材としており、作中に詩人自身が登場して社会主義社会の建設やそこに生活する人々をルポライターのように物語る叙事性の強いスタイルが採用された。

しかし反右派闘争を経て数多くの同僚が“右派”のレッテルを貼られて農村に追いやられ、大躍進の失敗によって人々が飢えに苦しんだ50年代末以後、岡夫の作風は大きな変化を見せる。従来ほとんど存在しなかった旧体詩が多くを占め、内容的にも友人との交友や過去の回想、国外のニュースといった題材を扱うようになり、数少ない自由体詩においても詩人の眼差しは外の現実から離れて自らの過去と内面に向けられるようになる。

このように、40年代から50年代前半にかけて維持されてきた岡夫の叙事的な詩風は50年代終わりに姿を消し、より制限の多い形式を用いて自らを抑制し、外的世界よりも自己の内面に目を向けるようになってしまう。こうした詩風は文化大革命期、そして80年代以降も続くのであろうか？次章では岡夫の文化大革命期から80年代以降の晩年の作品に注目していく。

5. 文革期から晩年の岡夫

5.1 文革期の岡夫

1966年5月、文化大革命が勃発すると、岡夫は趙樹理ともども文聯所有の住宅に拘束される。程なく嘗て草嵐子監獄に収監されていた経歴が問題視され、薄一波ら61名の同志たちとともに“六十一人叛徒集団”に仕立て上げられてしまい、都市から故郷の農村に追い出され、創作の権利も剥奪されてしまう²²。

当時山西文聯に所属していた青稞は、岡夫の身近に在って自身も批判を受けており、文化大革命初期の岡夫について次のように回想する；

1969年に省級機関の幹部は北京の中央が設置した“毛沢東思想学習班”で学習することとなり、国慶節の時には中央のトップと接見の機会があった。しかし岡夫と青稞の2人は“問題が重い”理由からその権利を剥奪されてしまう。青稞はその不条理に怒るが、岡夫は不平を漏らすでもなく泰然としていた²³。

また、作家西戎によれば、都市を追われ故郷である武郷県の農村に入った岡夫は、現地の農民から老革命家として尊重され、かつての同志や文芸工作者も頻繁に彼のもとを訪れるなど、当時としては比較的恵まれた環境に置かれていたという²⁴。

1970年代に入り、詩人をめぐる状況はやや好転する。岡夫の息子である王稚純によれば、当時の岡夫は、“六十一人叛徒集団”の一員として政治生命を失い、山西省高級法院内の山西省審幹弁公室に収監されていたが、以前よりも自由が与えられ、保護観察のような状態になっていたという。²⁵

こうした環境の好転に伴い、岡夫1972年以降、密かに詩作を再開する。まずは再開当初に作られた「伏虎行」(1972年末)を見てみよう；

「伏虎行」(節録)

马列主义越胜利，
妖魔变形越怪异。

君不见？—

现世奸雄“一只虎”，
当年手摇红书狂乱舞，
卑躬贴近主席身，
“万岁万岁”不离口。

主席领导—

文化革命苦费心，
原意构想为人民；
因风却引吹火客，
混水钻来摸鱼人。

「伏虎行」

マルクスレーニン主義が勝利するたびに、
妖怪はますます奇怪に変形する。

君は見えていないか？—

現世の奸雄“一匹の虎”は、
当時語録を手にとり狂喜乱舞し、
卑屈に主席にすり寄り、
“万歳万歳”を唱え続ける。

主席や指導者たちは—

文化大革命に心を砕き、
もとは人民のためだったのに；
風に乗じて火勢を増す輩を呼び寄せて、
火事場泥棒も紛れ込ませてしまった²⁶。

このように旧詩体に近いスタイルで指導者層への変わらぬ忠誠と、文化大革命に乗じて権力を握った人々への怒りを表明している。以後、70年代中葉までは、「寄友」(1974年)、「存問」(1974年)、「夢回」(1975年)、「致友人」(1975年)、「答同齡老友吉範五兄」(1975年)など共に苦難に耐える友人に宛てた作品が多くを占めるようになる、その中のひとつであり、数十年來の旧友の手紙に答えて作った「存問」(1974年)に目を向けてみよう；

「存問」

故人存問情油然，
因与故人述达观：
生死固尝抛度外，
毁誉谁肯置心间！
犹思效命贾余勇；
倘得天年敢自嫌？
乘化羽飞飘然去，
扶摇直上绛云巅。

「存問（安否を問う）」

老友が安否を尋ねて情が湧き起こる、
そこで旧友と達観について述べよう：
生死は固より度外視し、
毀誉褒貶など誰が気にしようか！
今も尚命をかけて残りの力を振り絞る；
もしも天寿を得ても不満などあろうか？
自然の流れに従って飄然として去り、
つむじ風に吹かれて絳雲の頂に上ろう²⁷。

老境にさしかかった詩人の、生死も評価も度外視して余力を振り絞り、後は自然の摂理に任せようという“達観”が詠われている。第7句「乗化」は陶淵明「帰去来辞」に²⁸、第8句「扶摇直上」は『莊子』『逍遙遊』に用いられており²⁹、一見世俗を離れた隠者の作のように読める。しかし、「扶摇」（つむじ風）に吹かれて到達する先は「絳雲の頂」＝紅い雲の頂点であり、党员としての復帰を待ち望む思いを詠ったとも受け取れる。こうした古典の字句を引いて隠者の風を装いつつも再び社会や読者に奉仕する日を待ち望む姿勢は、『楚辞』『離騷』を連想させる字句を用いた「寄友」（1974年）や「大運」（1973年）などにも共通して見出すことができる。

1976年、中国共産党の中枢を支えてきた周恩来、朱徳が相次いで世を去る。そして9月には文化大革命の発動者である指導者毛沢東が死去し、10年にわたる混乱期は終結に向かう。この時期の岡夫は、革命の指導者たちを悼む思いを「悼周総理」（1976年）、「咏朱総」（1976年）、「永恒的悼念」（1976年9月）といった旧詩体の作品に託して詠っている、ここで毛沢東への追悼の念を詠んだ「永恒的悼念」（1976年9月）を見ておきたい；

「永恒的悼念」

昊天如堕陆如沉，
寥廓中华泪海深，
一代导师悲诀别，
五洲战士痛怀亲。
永同马列垂青史，
长与人民共赤心。

「永遠の哀悼」

天が墮ち、陸が沈んだように、
広大なる中華の涙は海よりも深い、
一代の導師と永久に別れ、
世界の戦士は彼を懐かしむ。
とこしえにマルクス・レーニンと共に歴史に
名を残し、

扫天害虫清玉宇，
万花丛里聆高吟。

建党建军开新国，
反帝反霸震寰瀛，
百族翻身歌德泽，
万方革命感支撑。
丰功伟绩纷难举，
文采风骚卓可寻。
寿龄虽已悲荣逝，
“思想”开荡正无垠。

化悲为力望群英，
马列毛著学用精，
深研普遍真理义，
联系国情实际行。
安定团结搞生产，
警惕战争保和平。
继承遗志干到底，
共产高峰勇攀登。

いつまでも人民と赤心を共にする。
害虫を駆除して世界を清め、
幾万もの花の中で高らかな歌声に耳を傾ける。

党と軍を打ち建てて新たに国を開き、
反帝国反覇権の動きは全世界を揺るがす、
あらゆる民族は生まれ変わってその徳と恵み
を詠い、
各地の革命は支えを手に入れた。
その偉大な功績は数え切れず、
その文才は衆に抜きん出ている。
天寿は已に尽きるとも、
“思想”はまさに無限に広がる。

悲しみを力に変えて群英に望むは、
マルクス・レーニン・毛沢東の著作を精読し、
普遍の心理を深く学んで、
国情に合わせて実行に移す。
団結して生産に励み、
戦争を警戒して平和を保つ。
遺志を徹底的に継承し、
共産主義の頂目指してよじ登る³⁰。

このように毛沢東の死を悼み、その事績を称えた上で、最後に悲しみを乗り越えて彼の意志を継ぎ、未来を創ろうと呼びかけている。

文化大革命終結までの10年間、岡夫は19首の作品を創作しており、すべて五言か七言の旧体詩の形式を採用している。70年代中葉の作品においては古典の字句を引きつつ自らを隠者になぞらえることもあったが、この時期の作品からは一貫して再び人民や社会に奉仕したいという願望や、中国共産党への忠誠心を読み取ることができる。

4.2で分析したように、岡夫の詩風は50年代末から60年代において突然旧詩体が増え、内容も過去や自身の内面に目を向けたものへと変化するなど、急

激な変化を見せている。本節で取り上げた文化大革命期の作品群も基本的にこの詩風を引き継いでいると言えるが、公にしないことを前提としているためか、文革で権力を握った人々への怒りや、復帰願望、指導部への忠誠心といった岡夫の心情がよりストレートに表出された叙情的な作品が多くを占めている。また、「永恒的悼年」(1976年9月)でも詠われているように、詩人のまなざしが再び未来へと向けられているのも興味深い。

5.2 文革終結後から改革開放期へ

5.2.1 文化大革命終結と名誉回復

毛沢東が世を去った翌月(1976年10月)、文化大革命を主導していた江青ら4人組が逮捕され、10年にわたる大混乱期は終焉を迎えた。それに伴い岡夫は武郷県の農村から太原に呼び戻され、名誉回復のための審査を待つ身となる³¹。この時期、岡夫はまず「中国十月擒妖記」(1977年)において自身に無実の罪名を押し付けた4人組への怒りを表明し、また彼らを逮捕した党中央への感謝と革命が護られた喜びを詠う；“顧みるにかの“四人組”は、／ただ私欲を逞しくするを知るのみ。／世に名利を争い、／出しゃばることだけ十二分。／官位が上がるほどに、／野心も昂ぶる。／大げさに修正を談じ、／騒がしく分裂を進める、／秘かに詭計をもてあそび、／自らの威を恣にする。／周総理を陥れ、／妄りに指導者グループを組織せんとし、／是非は逆さまになり、／「罪」名を徒にでっち上げ、／多くの人々に打撃を与えて、／ごく一部に諂う。”(中略)

“紅旗が青空に映え、／青くたなびく炊煙に麦の苗が緑に色づく・・・／一発の銃声も無く、／一滴の血も流さず、／革命は救われ、／国家の赤色は護られた！／中国の十月は、／永遠に歴史に輝く。”

1978年秋には毛沢東の故郷である湖南を訪れ、自由体詩と旧体詩を織り交ぜた「湘遊雜句(七首)」(1978年)を創作し、革命の出発点を偲び(「長沙」,「登岳麓山」)、同時に“4つの現代化”政策が切り拓く未来を詠っている(「韶山銀河」)。

1978年12月、中国共産党第11回三中全会において党中央は“61人叛徒集團事件”は冤罪であったと認め、岡夫らは名誉回復を果たす。多くの同志が北京に戻ることを選ぶ中、岡夫は山西省に留まることを選び³²、山西省文聯副主席、山西省作家協会副主席といった要職に就いて文芸組織の回復および後進の育成に当たることになった。

5.2.2 名誉回復から：80年代前半の岡夫

自由と名誉を回復した岡夫は、省文芸界の長老として若手詩人の育成や地方文芸誌の創刊の支援といった業務に励む傍ら、旺盛な創作活動を再開した。まず彼が取り組んだのは、「悼魯言、子榮、錫奎、錫五、其梅暨“六十一人案”中殉国諸同志」(1979年)、「悼安子文、呉雲夫同志」(1980年)、「板話憶老趙」(1980年9月)といった作品を通じて文化大革命期に犠牲となった仲間を悼む想いを詠うことであった；

「板話憶老趙」(節録)

说起赵树理，
我也扯一谈：
当初小二黑，
结婚遭磨难，
老赵挥妙笔，
笑杀老封建。
“板人”李有才，
巧划阶级线。
几句顺口溜，
戳穿假模范：
“西头吃烙饼，
东头喝稀饭。”
两篇好小说，
画出好世面，
领导笑点头，
群众抢着看，

「板話もて老趙を想う」

趙樹理と言えば、
私もすこし喋らせてもらおう；
はじめ小二黒は、
結婚に難儀したが、
老趙の見事な筆は、
封建主義を笑い殺した。
“快板名人”李有才は、
巧みに階級の境界線を引いた。
韻を踏みながら、
偽模範をすっぱ抜く：
“西ではラオピンを食べているが、
東はお粥を呑んでいる”。
二編の佳い小説は、
いきいきと世間を描きだし、
指導者たちは笑って頷き、
群衆は先を争って読む³³、

これは古い友人であり、岡夫の詩才を評価していた作家趙樹理の死を悼む作品「板話憶老趙」(1980年)の冒頭部分である。前半では「小二黒結婚」,「李有才板話」といった作品を発表し、農村読者の絶大な支持を得た彼の業績を「李有才板話」でも採用していた“板話”という民間歌謡のスタイルを採用しつつ歌い上げている。

老趙在晚年，
与我住同院，

老趙はその晩年、
私と同じ公寓に住んでいた、

“文革”勸令繁，
 挨斗常伴作，
 弯腰请罪批，
 仰头示众看，
 艰难互慰勉，
 谈笑时无厌，
 甚感友道长，
 诘料死生散？
 倏忽逾十载，
 时光惊流电。
 惭君不朽才，
 愧我难述善，
 学作快板句，
 奠君魂彼岸。

“文革”の強権が頻繁になると、
 批判闘争は常に道連れ、
 腰を屈めて罪を認め、
 頭を上げて群衆に示す、
 艱難を互いに慰め合い、
 談笑して飽くことを知らず、
 友情の長さをかみしめる、
 どうして死と生が道を分かつと知ろうか？
 忽ち10年が過ぎ去り、
 時の流れの早さに驚く。
 君の不朽の才に引け目を感じ、
 その素晴らしさを言い尽くせないことを恥じ入る、
 君に倣って快板を作り、
 君の魂に捧げよう³⁴。

続く後半から結末にかけては、趙を襲った文革の悲劇と苦境の中での友情を想い出し、この世を去って既に10年になる友人の才を惜しんで作品を終えている。

このように、70年代末から80年前後にかけては、文化大革命中に命を落とした友を悼む作品や、また「無題有贈」(1978年)、「今三甲」(1980年)のように文革の傷跡を振り返り、4人組への怒りを表明した作品が集中的に作られている。

一方で詩人の眼差しは、彼を苦しめた過去や自己の内面から、次第に開かれた外の世界や未来の希望に向けられるようになる、1980年の新年を迎えるに当たって作られた「拉拉隊之歌」(1980年1月)を見てみよう；

「“拉拉队”之歌」(節録)
 让诗歌插上翅膀，
 飞到祖国的各条战线，
 沿着社会主义的方向，
 唱出时代的强音，人民的希望；
 在祖国胜利进军的
 每一段路上

「応援団の歌」
 詩歌に翼を挿して、
 祖国の各戦線のもとに飛び、
 社会主義の方向に沿って、
 時代の声を、人民の希望を歌おう；
 祖国が勝利に向けて進軍する
 その途上で

喊着、唱着，
唱着、喊着：
做一支活跃的“拉拉队”！

坚定地，响亮地，
唱一条路线：
为着祖国灿烂的现代化。
调动浩浩荡荡的千军万马，
向着这个目标前进：
贡献每一个人—志愿贡献的
忠诚、才智、理想、以致生命！
同心同德，百折不挠，
把社会主义的建设搞上去！
把经济搞上去！
从始至终为这一条金色的路线，
高喊，高唱！

叫び、歌い、
歌い、叫ぶ：
活発な“応援団”となろう！

しっかりと、高らかに、
ただひとつの路線を歌う：
祖国の輝かしい近代化のために。
威風堂々たる大軍団を結集し、
最終目標に向けて前進する；
一人一人が捧げた—自ら望んで捧げた
忠誠、才知、理想そして生命！
一心同体となり、不屈の意志が、
社会主義の建設を完成させる！
経済を向上させる！
徹頭徹尾この黄金の路線のために、
高らかに叫び、歌え！³⁵

党の改革開放政策の下、中国が経済発展を遂げるために皆が力を合わせて奮闘する中、詩歌はそれを支援する“応援団”となろうと呼びかけている。この作品から読み取れるのは、解放直後の作を髣髴とさせる共和国の未来への希望と“文芸は政治に奉仕すべし”という数十年来岡夫が守り続けてきた文芸創作の基本認識であり、こうした党の政策を支持し、中国の発展を寿ぐ作品は本作の後、「希望与追求」(1981年12月)、「羅針与照星」(1982年1月)、「新春即興」(1983年2月)、「国慶三十五周年抒懷」(1984年)など数多く発表され、80年代前半の詩風の主流となっている。

また、この時期岡夫は省文芸界の長老の公務として会合や視察に赴き、「為戯曲会演題句二則」(1981年1月)、「致晋劇領導諸同志」(1981年)、「呂梁雜句七首」(1982年)、「一衣帶水曲」(1984年)のような旧詩体の作品を数多く残してもいるが、文化大革命期のような隠者の風は姿を消し、ストレートに自身の感情や印象を詠うようになっている。

さらに、80年代前半において、「嬰兒的魅力」(1982年6月)、「一個平人的自

伝](1982年12月),「頌](1983年),「心的陀螺](1984年5月)のような国家や社会から離れ、個人の感興や思索を詠ったものが登場しつつあるのは注目に値する。「岡夫詩における叙事性」(上)においても指摘したが³⁶、30年代に革命運動に参加してから詩人の眼差しは絶えず社会や国家に向けられており、こうした個人の感興や思索が題材となるのは非常に稀である。

このような作風の変化は形式面にも現れており、詩人の心の解放に呼応するかのように、文化大革命期には皆無であった自由体詩が再び増加し始めている。

年代	77	78	79	80	81	82	83	84
自由体	1	0	0	1	6	7	2	7
旧体	1	4	8	10	15	5	0	10

5.2.3 生涯最大の豊作期：80年代後半

80年代後半は岡夫の生涯において最も豊かな収穫の時期であった。彼は名誉回復を果たした後、60年代に一度完成させたものの、文化大革命期に“叛徒”の証拠として山西省高級法院資料室に押収されていた『草嵐風雨』の原稿を取り戻し、加筆の上完成させて85年に人民文学出版社から出版し、長年の宿願を果たした。また同年、創作60周年を記念して自身が選んだ詩歌150首あまりを収録した『岡夫詩選』(山西人民出版社)も発表している。

文芸工作者としての生涯の総仕上げのような仕事を進める一方、85年以降89年に至る5年間の作品数は年代が明確になっているものだけでも151篇を数え、喜寿を迎えてなお盛んな創作意欲を示している；

年代	85	86	87	88	89
自由体	6	12	21	29	20
旧体	18	9	11	9	16

この時期の作品は、基本的には80年代前半同様の傾向を持っており；

- ① 改革解放をはじめとする党の政策を支持し、中国の発展を寿ぐ作品；
「楽無辺」(1985年),「文興三章」(1985年),「致太原」(1987年4月),「祝福你—世界」(1987年10月),「古与今」(1987年11月),「更代」(1987年),「記感兼祝賀」(1989年1月),「黙禱」(1989年5月),「不惑」(1989年9月),「礼花」(1989年9月)など
- ② 視察や会合における記念の作品；
「為“魯芸”木刻選展題句」(1985年7月),「為『郷土文学』題句」(1985年8月),「写在『青春詩会』的一頁上」(1986年),「『火花』復刊即興」(1986

年),「難忘的相会」(1987年10月),「為“黄土詩社”題句」(1989年2月)など

③ 友人との交流の作;

「戲答範五」(1985年3月),「贈葉君健同志」(1985年5月),「酬羅元貞教授」(1987年),「寄秦嶺」(1987年9月)など

④ 追悼の作;

「悼劉秀峰同志」(1985年4月),「悼武光湯同志」(1985年4月),「簡草嵐諸旧雨」(1985年),「由一位崇敬的同志的伝記引起的哀怨」(1986年11月),「文件—挽廖魯言同志」(1988年12月)など

といったテーマの作品が引き続き多く登場する。しかし一方で、従来は殆ど目にする事のなかったテーマの作品もこの時期には数多く創作されており、それは概ね以下の3種に分類できる。本項ではこちらの作品群に注目してみよう;

日常の感情や思索

岡夫は30年代に革命運動に参加して以降、その眼差しを社会や革命に向けて続けて来ており、それは旧詩体の作品が急増した50年代後半や文化大革命期間においても変わることはなかった。しかし前項で触れたように、80年代に入ってから個人の日常における感興や思索をテーマとした作品が登場し始め、80年代後半においてはこうした傾向の作品が相当数創作されることになる。ここで「燃倒了煙的啓発」(1988年5月)を見てみよう。

「燃倒了煙的启发」

一个人,正为着一个问题想不通而烦恼着。

他抓起一支烟,擦了火柴燃着,却又吸不通。

他又燃了一次,还是吸不通。

第三根第四根火柴也燃过了,仍然吸不通。

“什么鬼今天和我作怪呢?”他气得把它扔在一旁狠狠地瞪着。

袅袅的烟气和暗暗的火星,明明地还在燃着,没有熄灭。

「逆に燃やした煙草の啓発」

ある人が、ある問題に納得がいかず悩んでいる。

一本の煙草を手にし、燐寸を擦って火を点けた、だが吸えない。

もう一度火を点けた、だが吸えない。

3本、4本と燐寸を燃やしたが、やはり吸えない。

“何だって今日は私の邪魔をする?”彼は腹を立てて投げつけじろりと睨んだ。

立ち上る煙と暗がりの中の火の粉、あかあかと燃えて、消える気配がない。

他捡过来一看,不禁哑然失笑了:
原来他点燃了过滤嘴的一边。
暗笑一阵之后,忽然飞来一个灵感—
“是不是我把哪件事哪个问题也想得
颠倒了呢?”
于是他重新进入思索。

彼は拾って見て、哑然として失笑した：
彼はフィルターの方に火を点けていた
のだった。
こっそり笑ってから、突然靈感が下り
てきた—
“私はどの問題も逆に考えていたので
はないか？”
そこで彼は再び思索に入っていっ
た³⁷。

このように、日常のワンシーンにおける興味を軽妙にかつアリスティックに描いた作品は、本作以外にも；「労働与空談」(1987年6月)、「満足」(1987年11月)、「潜入」(1987年12月)、「春到人間」(1988年2月)、「仁与富」(1988年3月)、「観象」(1988年6月)、「探索的無窮」(1988年11月)、「機偶」(1988年12月)、「偶思」(1989年2月)など多数創作されている。

「夢」と「死」

この時期の岡夫は、自身の個人的な日常を題材とただけでなく、夢や死といったより抽象的かつ虚構性の高いモチーフも作中に登場させている、本稿では「我怕聽的那箇字」(1986年9月)に注目してみたい；

「我怕聽的那箇字」(節録)
「三」
我不知道誰在叩了一下門，
很輕微，却又很清脆。

門開了，
忽然看見是他，
我一點沒有準備。

我又開始心跳了，
但我告誡自己，
一定要鎮定—從容！

「私が耳にしたくないことば」
「三」
誰がドアを叩いたのか、
軽やかに、だがはっきりと。

ドアが開いた、
突然彼が居た、
私は全く準備をしていなかった。

また心臓がどきどきし始めた、
だが自身を戒める、
鎮まれ—落ち着け！

我已经从容了：

“请来，请来，请坐下！”

你不想坐吗？

那随便也可以。

你可以在我屋里走走，
我陪你看看我养的金鱼。

你看我的书桌多么凌乱，
书架上还插满一些小摆设，
我不怕你笑话。

你有点冒汗，
是不是觉得有些热？
请随便宽宽你的外衣。

你脸色有点发白，
我去给你煮点饮料—不要？

你的手、手指在颤动了。
你如果伸过来，
我想，我会接受。

你的嘴唇在翕动了。
我愿意听你谈话，
谈无论什么。

女排、迪斯科—
北京、深圳、好莱坞—
现实主义、象征主义、荒诞派—

落ち着いた：

“どうぞ、どうぞ、お座り下さい！”

座りたくないのですか？

ならばご随意に。

家の中を歩き回っても良いです、
一緒に飼っている金魚を見ましょうか。

文机が片付いておらず、
書架にあれこれ詰め込んでいるのを見て、
笑ってくださっても結構。

汗をかいておられるが、
暑いのですか？
どうぞ上着を脱いでください。

顔色がすぐれないようですが、
飲み物でもお持ちしましょうか—要りませんか？

手が、指が震えています。
その手を伸ばしてきたなら、
それを受け入れようと、思います。

唇が何やら言いたそうに動いています。
あなたの話を聞いてみたいです、
何の話であれ。

女子バレー、ディスコー
北京、深圳、ハリウッド—
リアリズム、象徴主義、不条理派—

黑格尔、马列主义、萨特—

经济政治改革，
星球大战，
宇宙飞船、飞碟…任什么都
可以。

但不要千万
不要吐出、带出
我怕听的那个字。

ヘーゲル、マルクス・レーニン、サルトル—

経済政治改革に、
スターウォーズ、
宇宙船にUFO…何でも構わない。

だが決して
決して
私が聞きたくないあの言葉を言わないでくれ³⁸。

「一」および「二」では、幾度も来訪しそうでなかなか“私”のもとにやってこない“彼”の足取りと“彼”を恐れつつも心静かに迎えようという心情をまるで日常生活の一部のようにリアリスティックに描いており、「三」ではついに“私”のもとを訪れた“彼”を目の前に、泰然と構え冗談も投げかける余裕も見せながら、ある一言だけは言わないでくれと心から願っている。

これはいつか訪れるであろう自身の死を心静かに迎えようと思いつつ、やはり恐れ焦らずにはいられない心情をリアリスティックかつ幻想的に描いたものであろう。

こうした自身の「死」や「夢」といった非常に個人的かつ虚構性の高い題材を扱った作品は、本作以外にも；「時間」(1985年3月)、「記夢之一」(1985年9月)、「生命樹」(1987年4月)、「神与肉」(1987年11月)、「偶拾篇(二十三首)」(1987年)、「夢見了高咏」(1988年7月)、「記夢之二」(1989年7月)、「夢中詰難」(1989年7月)などがある。

詩と詩人

自己の感興や思索、そして夢と死に至るまで表現の対象とした岡夫は、この時期、生涯の大半を捧げた詩自体も自身の言葉で詠おうと試みている。まず「疑問」(1986年)を見てみよう；

「疑問」

我久久想破译一个疑问：
诗，究竟是什么？

「疑問」

私は長らくある疑問を解きたいと想ってきた：
詩とは、一体何なのか？

究竟什么是它的
特殊的、特有的功能？
是否可以说(或已有人说过)——
诗就是人，
诗就是情，
诗就是人与人之间
灵魂直接交流的
电冲?!

一体何がその
特殊な、特有の機能なのか？
こう言っても良いのだろうか（既に誰かが
言っているかもしれないが） —
詩とは人だ、
詩とは感情だ、
詩とは人と人との間の
靈魂の直接の交流によって生まれる
火花だと?!³⁹

“詩とは何か？”と自問から始まる本作は、“詩とは～だ”と詩人自身も確信を持ってない解を幾つも列挙して終わっている。

また、同年発表された「詩的煩惱」(1986年11月)では、優美な旋律にふさわしい詩句を生み出す苦しみを詠う；

「詩的煩惱」
一种幽美的音韵旋律
常流荡在我胸中
徘徊于我的口唇里，
我反复地吟唱和回味着
而找不到哪怕是几句
适当表达的言语。
她很像一位在成熟中
倾向于初恋的少女
内心炽热而行动羞怯。
她已向我走来，而当我去接近
她时
她又像一头受惊的小鹿
仓皇地蹦跳着远离去

「詩の懊悩」
幽美な音色の旋律が
いつも私の胸の中で揺蕩い、
唇の中を徘徊する、
私は繰り返し口ずさみ思い返すが
ほんの数句の表現するのに
ふさわしい言葉が見つからない。
彼女は成熟途中の
初恋に心惹かれる少女のように、
内心は恋焦がれても行動は憶病だ。
彼女は既に私に近づいている、だが私が彼女
に近寄ると
驚いた小鹿のように
慌てふためいて飛び跳ね遠のいてしま
う⁴⁰。

さらに89年に発表された「給「拾穂人」」(1989年11月)では、詩人は一本一本落穂を拾って籠に入れ、金の粒を選りだす落穂拾いのようなものと詠い、後輩詩人たちに激励の言葉を贈っている；“あなたの詩稿籠もなかなかのものだ／もう幾許かの歴史が／さらに多くの現実が入っている／純朴な田舎も

／賑やかな都市も入っている／あなたの情緒情操も一杯／山水も一杯に詰め込んでいる／美しい平凡を／また平凡の中の美しさも拾い得ている／その上あなたの詩稿籠はまだ大きくなっており／そしてまだいっぱい膨らんでいる／詩の道のは遼遠で／祖国のほかの偉業と同様に／任務は栄光に満ちそしてきわめて困難だ／詩人たちよ／君たちの鉄のような背骨は／ぴんと張って重い詩稿籠を背負うだろうと”⁴¹。

こうした詩とは、詩人とは何か、自身の言葉で語ろうという試みは、「詩と観念」(1988年3月)、「関于詩人と詩」(1988年6月)、「贈」(1988年)、「追」(1988年)、「痒痒樹」(1989年7月)といった作品においても見出すことができる。

このように80年代後半において、岡夫は従来対象としてきた題材に加えて自身の感興や思索、夢や死、そして自身の生涯を掛けた詩そのものも詩と言う形式で表現しようと試みている。手法的にも自由体と旧体、叙事性と叙情性を巧みに使いこなしており、この時期は傘寿を迎えた岡夫にとって最も豊かな収穫の時期であったと言える。

5.3 90年代、晩年の岡夫

90年代に入り、岡夫の創作ペースはやや落ち着くものの、党の政策を支持して中国の発展を祝い(「歌」(1990年)、「賀節俚句」(1992年2月)、「修路」(1994年5月)など)、友と交り(「戲贈則民同志」(1991年3月)、「致詩人朱子奇同志」(1992年8月)、「祝賀馬、李、西、孫、胡創作五十年口占」(1994年5月)など)、亡き人を弔い(「吊王中青同志兼憶諸亡友」(1990年4月)、「挽孫謙」(1996年3月)、「挽鄭篤」(1996年8月)など)、詩や文芸を詠うなど(「知文芸者」(1990年4月)、「采詩花」(1992年6月)、「詩漫遊」(1994年))、基本的には80年代と変わらぬ題材の作品を創り続けている。

1994年、山西省作家協会と岡夫の故郷である武郷県が協力して岡夫作品検討会を開催し、数十名もの作家・詩人・評論家が彼の70年あまりに及ぶ詩人としての生涯と作品を対象として活発な議論を繰り広げた。検討会の後、会での発言や関連記事、論文を集めた『岡夫創作70周年紀念文集』が山西高校連合出版社から出版されている。

岡夫の最後の作品は、香港返還までの苦難の道りを振り返り、返還式典を讃え詠った「心香一瓣」(1997年7月)であり、生涯中国共産党に忠誠を尽くし、革命の推進をその創作の主目的としてきた詩人の最後を飾るに相応しい作であった；

「心香一瓣」

举世同庆迎回归
心香一瓣献回归
啊,香港!祖国的热土
祖国的亲生的儿女们
现今就要回到了
伟大母亲的怀抱

啊,一百五十年啊
多少次的抗争和失败
多少次的屈辱和烦恼
曾逼使我们
不得不一件件地
冲破和扫除

严重的挑战我们曾遇过
甚至“灾难性影响”的威胁
我们准备了一切的可能
包括我们不愿采取的方式
但“一国两制”的坚定信念
为我们创建了最理想的选择

于是有了频繁的活动
进行着各方面的商讨
采取着对话
排除去对抗
消解了冲突
迎来了祥和

这一伟大的胜利
充分显示了我伟大民族的自豪

「一片の敬虔な心」

世を挙げて共に帰還を喜び迎えよう
一片の敬虔な心を帰還に捧げよう
ああ、香港！祖国の土地よ
祖国の血を分けた儿女たちが
今や偉大なる母親の懷に
帰ろうとしている

ああ 150 年だ
幾度の抗争と失敗を
幾度の屈辱と苦悩を
かつて我らに
ひとつひとつ
突破し排除させてきたことか

重大な挑戦に我らは遭遇してきた
“災害的な影響がでる”という威嚇にも
我らは全ての可能性に対して準備をした
我らが採りたくなかった方法までも含めて
だが“一国両制”の堅固な信念は
我らに最も理想的な選択を齎してくれた

そして頻繁な活動がはじまり
各方面の検討が進み
対話を採って
対立を排除し
衝突を解消して
協調を迎えた

この偉大な勝利は
十分に我が偉大なる民族の自尊心を顕示し
た

而也为世界各国的和平
提供了出色的典范
使之在各自国情的轨道上
自由地创造着繁荣……

啊,一九九七年六月三十日夜晚
香港开了世界上最盛大的集会
最重要的政治界领袖们出席了
最广泛的各界人民代表们集合了
最庄严的仪式在举行着
最多样的传媒和艺术品种在演奏
和展赛着
啊,最亲切的呼唤
最热诚的期待
最欢欣的眼泪
最激动的接吻和拥抱
共同演奏一场空前未有的
世界性—历史性的壮丽凯歌

そして世界各国の平和に
抜きんでて模範を提供し
それぞれの国の道のりの上に
自由な繁栄を創造させました……

ああ、1997年6月30日の夜
香港は世界で最も盛大な集会を開いた
最も重要な政治界の指導者たちが出席した
最も広範な各界の人民代表が集合した
最も荘厳な儀式が挙行され
最も多彩なメディアと芸術項目が演奏され
展開された
ああ、最も親密な呼び声
最も情熱的な期待が
最も喜びに満ちた涙が
最も感動した接吻と抱擁が
一緒になって史上空前の
世界的—歴史的な壮麗な凱歌を奏でた⁴²

岡夫の晩年の生活は規則正しいものであった。毎朝早くに目覚め、戸外へ出て運動し、午前中は自身の書斎兼寝室で読書したり新聞を読んだりして過ごす。昼食後昼寝をしてから、午後は読書あるいは執筆時間に充て、夕食後はニュース番組をみて10時ごろ就寝した。晩年やや耳が遠くなったとはいえ、視力はずっと良好で、読書や新聞を読む際眼鏡を掛けたことがなかった。枕元には線装本の『唐宋詩醇』が置かれており、書卓にはバイロン、シェリー、ホイットマンの詩集があったという⁴³。

岡夫は90歳の誕生日を迎える際、「九十述懐」という五言絶句の中で；“九十にして盛世に逢い、／一生で最も満足する。／願わくは百歳の関を跨ぎ、／さらに二十一世紀までしがみつこう。”⁴⁴と100歳を越えて21世紀まで永らえようと願ったが果たせず、1998年4月14日午前8時、91歳でこの世を去った。彼の死後、山西省作家協会は楊占平と岡夫の子息王稚純に委託して3巻160万

字の『岡夫文集』を編集し、2001年に山西人民出版社から出版している。

6. 終わりに

以上、岡夫の中華人民共和国成立後の生涯と作品を年代順に分析してきた、ここで改めて1920年代から90年代に至るまで70年以上にも及ぶ彼の詩作の変遷の跡を追ってみたい；

少年期の岡夫は、西欧近代文学の影響を受けて1920年代から“愛”・“生命”・“創作”といったテーマを叙情的かつロマンティックに詠い始める。しかし次第に社会的なテーマに関心が向かい、革命運動に参加した1930年代初めには、自身の革命運動の経験を叙事的かつリアリスティックに物語るようになっていた。抗日戦争・国共内戦期においては、“文芸は政治に奉仕すべし”という姿勢のもと、自身が見聞した群衆の戦いや生まれ変わりを物語性豊かに詠いあげた。そしてこの時期の物語性豊かな作品からは、当時山西の解放区で発表された小説に共通して存在している【問題⇒解決】構造を見出すことができる。

中華人民共和国成立から50年代中葉までの時期においては、40年代の作品のような物語性はやや弱まるものの、社会主義建設の現場や新社会で暮らす人々の生活をリアリスティックに物語る叙事性の強い作風は維持されている。

しかし反右派闘争を通じて多くの仲間を失い、大躍進の失敗によって社会の危機的な状況を目にした50年代末に到って岡夫の作風は大きく変化した。党への忠誠心と詩人としての良心の葛藤からか、従来ほとんど創作してこなかった旧体詩が大部分を占め、友人との交流や過去の回想、自身の内面を詠うようになる。

10年にわたる文化大革命期間中、岡夫は“61人叛徒集団”というレッテルを貼られて創作の権利を奪われ、農村に追いやられてしまう。この時期の作品は全て旧体詩であり、4人組への怒りや、隠者の風を装いつつも復帰を願う岡夫の心情が描かれた叙情的な作品が多い。

文化大革命終結後、名誉回復を果たした岡夫は、旺盛な創作欲を示し、大量の作品を発表する。この時期の作品のテーマは、党の政策や社会発展の賛美、友人との交流、亡き友の追悼といった従来の傾向を引き継ぐものの他、詩人個人の感興や思索、そして「死」・「夢」・「詩」といったこれまで対象としてこなかった題材にも目を向け、非常に幅広いものとなっている。手法的にも自由体と旧体、叙事性と叙情性を巧みに使いこなしており、晩年になって最も豊かで

自由な境地に到達していたと言えよう。

こうした西洋近代文学の影響を受けた叙情的なスタイルから出発して40年代に叙事性の強い作風を確立し、50年代末に転換点を迎える、という変化の軌跡は同世代の作家趙樹理の作風の変遷に酷似しており、馬烽，西戎，孫謙，胡正，東為といった一世代下の作家にも共通して見出すことができる⁴⁵。小説を主とする“山葉蛋派”作家群に共通する変化の軌跡が、詩人であり、“山葉蛋派”の作家たちより一足早く狂飆社の一員として文芸の世界に身を置いていた岡夫にも見いだせることは非常に興味深い。

この現象を時代精神のなせる業、あるいは毛沢東『文芸講話』の影響力や共和国成立後の文芸政策によって導かれたものである、と断ずるのはやや早計であるように思う。この問題についてはさらに詳細な調査を経たうえで改めて考察してみたい。

¹ 本稿において使用する中国語の簡体字，繁体字は、引用部分を除いてできる限り日本語の新字体で表記することとする。

² 『島大言語文化』35号 2013年10月 p 35-p 67

³ 「把我们的文学向前推进一步」(『岡夫文集』(山西人民出版社 2001年7月、以下『文集』) p 1479) 1951年

⁴ 『文集』1巻 p 300

⁵ 同上 p 304

⁶ 同上 p 316

⁷ 同上 p 324

⁸ 「戦闘与歌唱」何鋭 『文芸界通訊』1993年4期、ただし本稿では『岡夫創作七十周年紀念文集』(山西省作家協会編 山西高校聯合出版社 1995年) 所載のものを参照した。

⁹ 『文集』1巻 p 326

¹⁰ 同上 p 328

¹¹ 同上 p 330

¹² 注8に同じ。

¹³ 『文集』1巻 p 364

¹⁴ 同上 p 378

¹⁵ 拙稿「岡夫詩における叙事性（上）」(『島大言語文化』35号 2013年10月 p 35-p 67)

を参照願いたい。

16 『文集』1巻 p 385

17 同上 p 369

18 同上 p 370

19 拙稿「趙樹理文学の変容」(『島大言語文化』15号 2003年)、「馬烽文学における語り」(『島大言語文化』20号 2006年)、「西戎文学における物語構造」(『島大言語文化』24号 2008年)、「胡正文学における物語」(『島大言語文化』26号 2009年3月)、「孫謙文学における語り」(『島大言語文化』30号 2011年3月)、「東為文学における物語性」(『島大言語文化』31号 2011年10月)を参照されたい。

20 「代唁」(『文集』3巻 p 1400 1986年9月19日)

21 『文集』1巻 p 438

22 「代唁」(『文集』3巻 p 1400 1986年9月19日)、「在岡夫作品研討会上的讲话」焦祖堯(『岡夫創作70周年紀念文集』(以下『紀念文集』)山西省作家協會編 山西高校聯合出版社 1995年)、「滿懷愛心的詩人」—在岡夫作品研討会上的讲话 西戎(『紀念文集』)、「岡夫の人品与作品」青稜(『太原晚報』1987年11月5日初出、本稿では『紀念文集』所収のものを参照した)ほか

23 「岡夫の人品与作品」青稜(『太原晚報』1987年11月5日初出)

24 「滿懷愛心的詩人」—在岡夫作品研討会上的讲话 西戎(『紀念文集』1995年)

25 「再憶父親—獻給父親百年誕辰兼懷一位“知名不具”可欽可敬的詩人」王稚純(『山西文学』2007年1期)

26 『文集』1巻 p 439

27 同上 p 446

28 “聊乘以婦尽、樂夫天命復奚疑。”「婦去來辭」(『陶靖節詩集』(台湾商務印書館 1965年『叢書集成簡編』所収)

29 “鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九万里、去以六月息者也。”「逍遙遊」(『莊子集解』p 1 (王先謙 上海書店 1986年『諸子集成』所収)

30 『文集』1巻 p 463

31 「八句詩翁登高楼」燕治国(『紀念文集』p 187)

32 『岡夫の生平与創作』(楊占平 山西出版電媒集團、三晉出版社 山西歷史文化叢書 2011年9月)

33 『文集』1巻 p 510

34 同上 p 514

35 同上 p 503

36 「岡夫詩における叙事性(上)」(『島大言語文化』35号 2013年10月 p 35-p 67)

³⁷ 『文集』2巻 p 728

³⁸ 同上 p 640

³⁹ 同上 p 636

⁴⁰ 同上 p 646

⁴¹ 同上 p 816

⁴² 同上 p 955

⁴³ 『岡夫の生平与創作』 p 31（楊占平 山西出版传媒集团 三晋出版社 山西歴史文化叢書 2011年9月）

⁴⁴ 『文集』2巻 p 931

⁴⁵ 拙稿「趙樹理文学の変容」(『島大言語文化』15号2003年),「馬烽文学における語り」(『島大言語文化』20号2006年),「西戎文学における物語構造」(『島大言語文化』24号2008年),「胡正文学における物語」(『島大言語文化』26号2009年3月),「孫謙文学における語り」(『島大言語文化』30号2011年3月),「東為文学における物語性」(『島大言語文化』31号2011年10月)を参照されたい。